

平成 19 年度

病害虫発生予報第 6 号

平成 19 年 10 月 24 日

三重県病害虫防除所

515-2316 三重県松阪市嬉野川北町 530

TEL 0598-42-6365 Fax 0598-42-7568

ホームページ<http://www.mate.pref.mie.jp/bojyosyo>

目 次

	ページ
1. 向こう 1 か月の予報と対策	1
2. 作物別の状況	2
3. 発生時期・発生量（平年比）の予察根拠	5
4. 予察項目の見方	8
5. 今月のトピックス 「キャベツの黒腐病」	9
6. 気象のデータ	10
7. おしらせ	12

1. 向こう 1 か月の予報と対策

1) 果樹

カンキツでは、ミカンハダニの発生量は平年並と予想されます。

2) 茶

カンザワハダニの発生量は平年並と予想されます。

3) 野菜

トマトでは、疫病の発生量はやや少と予想されます。

イチゴでは、ハダニ類の発生量はやや多と予想されますので密度の低いうちに防除をしてください。うどんこ病、炭疽病の発生量は平年並と予想されます。

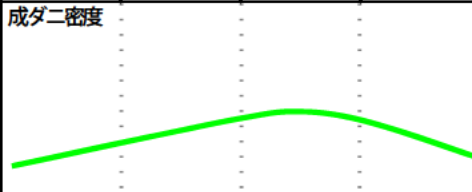
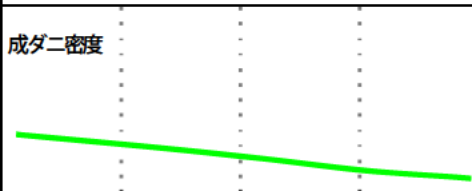
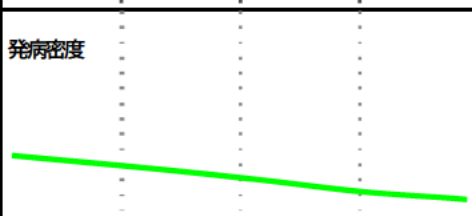
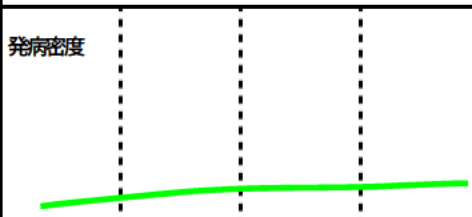
ハクサイでは、白斑病の発生量は平年並と予想されます。

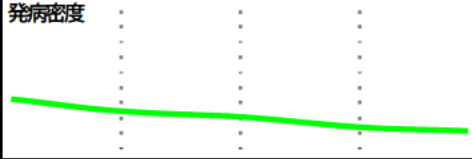



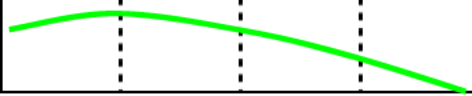
キャベツでは、菌核病の発生量はやや多と予想されますので降雨後は早めに薬剤散布をしてください。黒腐病の発生量は平年並と予想されます。

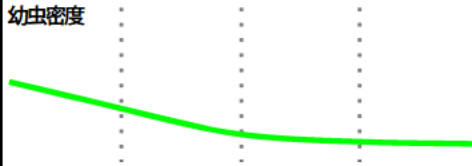
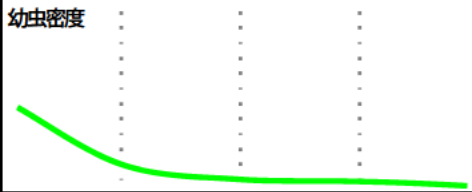
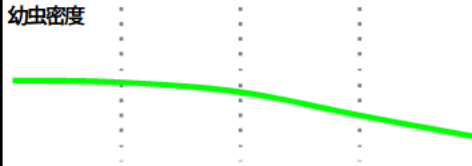

ネギでは、ネギコガの発生量は平年並と予想されます。シロイチモジヨトウの発生量はやや少と予想されます。

野菜共通では、ハスモンヨトウの発生は、やや多、コナガの発生は、やや少と予想されます。

2. 作物別の状況

作物名	病虫害名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						10月	11月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
カンキツ	ミカンハダニ	—	平年並	中	普通	成ダニ密度 				1) 現状で1葉当たり雌成虫数が0.5~1.0頭になっていなければ防除の必要はありません。 2) 中晩柑類で袋かけをする品種では、作業にかかる前に必ず発生状況を確認し、必要に応じて防除を行ってください。
チャ	カンザワハダニ	—	平年並	小	普通	成ダニ密度 				1) 発生密度が高くなければ防除の必要はありません。
トマト	疫病	—	やや少	小	普通	発病密度 				1) 初発を認めた場合は、集中的に薬剤散布します。 2) 窒素肥料を過用すると、茎葉が軟弱になり発生しやすいので、過用は避けます。 3) 20℃ぐらいの低温で多湿の時に発生が多くなります。 4) 病原菌は被害植物とともに土の中に残り、伝染源となるので、被害株・枯死株は圃場外で処分します。
イチゴ	うどんこ病	—	平年並	小	普通	発病密度 				1) ビニール被覆後、10月以降は発病適温となるため、発生が増加します。 2) 予防に重点を置いて防除し、硫黄くん煙剤を使用する方法もあります。 3) 発病を認めたときは、集中的に薬剤散布し、十分に防除してください。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項		
			平年比	平年比		程度	平年比	10月	11月			
								下旬	上旬		中旬	下旬
イチゴ	炭疽病	—	平年並	小	普通	発病密度 				<ol style="list-style-type: none"> 1) 感染株が、本圃定植後に発病します。また、開花時期や着果時期の株に負担がかかる時にも発病します。 2) 発病株は周りの土ごと圃場外へ持ち出し、適切に処分します。苗がある場合は、補植を行います。 3) 発病株周辺を親株(来年用)としないようにします(無病苗を親株にします)。 		
イチゴ	ハダニ類	—	やや多	小	普通	成ダニ密度 				<ol style="list-style-type: none"> 1) 寄生を確認したら、できるだけ早期に防除するようにします。 2) 薬剤をかかりやすくするため古葉を整理し、葉裏までしっかりと散布します。 3) 抵抗性が発達しやすいので、同一薬剤や同一系統薬剤の連用は避けてください。 		
ハクサイ	白斑病	—	平年並	中	普通	発病密度 				<ol style="list-style-type: none"> 1) 肥料切れしないようにし、発病初期の薬剤防除を徹底します。 2) 雨が多いと多発する傾向があります。 3) 病原菌は菌糸の形で被害葉の組織内で越冬し、伝染源となります。この胞子が空気中に伝染するほか、病原菌が降雨の際に土壌とともに飛び散って伝染します。 		
キャベツ	菌核病	—	やや多	小	普通	発病密度 				<ol style="list-style-type: none"> 1) 大雨があつたり降雨が続くと、発生しやすくなります。降雨後は早めに薬剤防除をします。 2) 菌核は土中で5年以上生き残ることがあるので、発病株は早期(菌核を形成しないうち)に除去し、畑に菌核を残さないようにします。 3) 大雨の後に胞子を産出し風によって飛散します。圃場外へも飛散するので、これまで菌核病の出ていなかった圃場でも発生します。 		
	黒腐病	—	平年並	小	普通	発病密度 				<ol style="list-style-type: none"> 1) 降雨後に感染することが多いので、降雨後は早めに薬剤防除します。 2) 発病株を放置すると翌年の伝染源となるので、焼却するか土中に深く埋め込みます。 		

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項		
			平年比	平年比		程度	平年比	10月			11月	
								下旬	中旬		下旬	中旬
ネギ	ネギコガ	—	平年並	小	普通	幼虫密度 				<ul style="list-style-type: none"> 1) 幼虫が葉の内部に潜るので、潜入防止のため発生の初期から防除しましょう。 2) 休眠はなく、1世代30～40日で年間10回前後発生します。 		
	シロイチモジヨトウ	—	やや少	中	普通	幼虫密度 				<ul style="list-style-type: none"> 1) 卵塊や、卵から孵化したばかりで集団になっている幼虫を見つけたら取り除きます。 2) 老齢になるに従って薬剤の効果が劣るので、若齢幼虫のうちに防除します。 3) 抵抗性が発達しやすいので、同一薬剤や同一系統薬剤の連用は避けてください。 		
野菜共通	コナガ	—	やや少	小	普通	幼虫密度 				<ul style="list-style-type: none"> 1) 抵抗性が発達しやすいので、同一薬剤や同一系統薬剤の連用は避けてください。 2) 秋の発生が多いですが、冬でも緩やかにながら生育を続けて加害します 		
	ハスモンヨトウ	—	やや多	中	普通	幼虫密度 				<ul style="list-style-type: none"> 1) 老齢幼虫に対しては防除効果が劣ります。 2) 今後気温の低下に従って、食害による被害は急速に減少します。 		

3. 発生時期・発生量（平年比）の予察根拠

作物名	病虫害名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
カンキツ	ミカンハダニ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(10月19日発表)によると、気温は低くなく(+)、期間の中頃は平年より降雨量が多い(-)予想(±)</p> <p>2) 県予察圃(10月中旬)では、100葉当寄生虫数は、無防除区で0頭(平年21.5頭)、防除区で0頭(平年37.6頭)と少(-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(10月第2週)では、平均寄生葉率は2.3%(平年5.4%)と少、1葉当平均寄生虫数は0.03頭(平年0.10頭)と少ない傾向(-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少~平年並(概して平年並)(±)</p> <p>考察： 一般圃場の状況を重視して、予想発生量は平年並と考えます。</p>
チャ	カンザワハダニ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(10月19日発表)によると、気温は低くなく(+)、期間の中頃は平年より降雨量が多い(-)予想(±)</p> <p>2) 県予察圃(10月上旬)では、寄生葉率は1.0%(平年2.4%)とやや少、1葉当寄生虫数は0.03頭(平年0.25頭)で少ない傾向(-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(10月第2週)では、平均寄生葉率は0.8%(平年0.6%)と多、平均寄生虫数は0.01頭(平年0.00頭)と平年並の傾向(±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量はやや少~平年並(概して平年並)(±)</p> <p>考察： 特に急増する要因は無いので、予想発生量は平年並と考えます。</p>
トマト	疫病	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 巡回調査圃場(10月第2週)では、発病株率は0%(平年0%)と平年並(±)</p> <p>2) 一般圃場では、発生量は少~やや少(概してやや少)(-)</p> <p>考察： 大きな増加の要因はないので、予想発生量はやや少と考えます。</p>
イチゴ	うどんこ病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(10月19日)によると、気温は低くない予想(+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(10月第2週)では、発病株率は0%(H16~18平均0.32%)と少(-)</p> <p>3) 一般圃場での発生量は、少~平年並(概してやや少)(-)</p> <p>4) 6~7月の発生量は、やや多(+)</p> <p>考察： 一般圃場での発生量は少ないですが、気象予想等を勘案して、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	炭疽病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 巡回調査圃場(10月第2週)では、発病株率0%(平年0.28%)とやや少(-)</p> <p>2) 一般圃場では、発生量は平年並~やや多(概してやや多)(+)</p> <p>考察： ハウス内(定植後)での伝染はしにくく大きな増加の要因はないので、予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病虫害名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イチゴ	ハダニ類	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(10月19日)によると、気温は低くない予想 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(10月第2週)では、寄生株率は8.8%(H16~18平均2.3%) (+)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察： 一般圃場での発生量は平年並ですが、気象予想等を勘案して、予想発生量はやや多と考えます。</p>
ハクサイ	白斑病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(10月19日)によると、期間の中頃は平年より降水量が多い予想 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(10月第2週)では、発病株率は9.3%(平年8.0%)とやや多 (+)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は少 (-)</p> <p>考察： 一般圃場での発生量は少ないですが、連作地での発生は多く、予想発生量は平年並と考えます。</p>
キャベツ	菌核病	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(10月19日)によると、期間の中頃は平年より降水量が多い予想 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(10月第2週)では、発病株率は0%(平年0%)と平年並 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量はやや少~平年並(概して平年並) (±)</p> <p>4) 昨年の発生量は平年並 (±)</p> <p>考察： 一般圃場等での発生量は平年並ですが、気象予想を勘案して、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	黒腐病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(10月19日)によると、期間の中頃は平年より降水量が多い予想 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(10月第2週)では、発病株率は0%(平年2.1%)と少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察： 巡回調査圃場での発病はありませんでしたが、気象予想を勘案して、予想発生量は平年並と考えます。</p>
ネギ	ネギコガ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃のフェロモントラップによる9月4半旬~10月3半旬の誘殺数は10頭(平年19.6頭)と少 (-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(10月第2週)では、被害葉率は0%(平年1.0%)とやや少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察： 巡回調査圃場での被害葉はありませんでしたが、一般圃場での発生量を重視して、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	シロイチモジヨトウ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃のフェロモントラップによる9月4半旬~10月3半旬の誘殺数は44頭(平年87.3頭)と少 (-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(10月第2週)では、被害葉率は1.7%(平年8.9%)と少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察： 一般圃場での発生量は平年並ですが、巡回調査圃場の発生状況を勘案して、予想発生量はやや少と考えます。</p>

作物名	病虫害名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
野菜 共通	コナガ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(10月19日)によると、気温は低くなく(+)、期間の中頃は平年より降水量が多い予想(+)(±)</p> <p>2) 県予察圃のフェロモントラップによる9月4半旬～10月3半旬の誘殺数は3頭(平年22.2頭)と少(-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(10月第2週)では、キャベツの寄生株率は1.4%(平年4.7%)と少(-)、ダイコンの寄生株率は0.4%(平年5.9%)と少(-)、ハクサイの寄生株率は1.0%(平年0.9%)と平年並(±)、ナバナの寄生株率は0.9%(平年4.2%)と少(-)(-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少～平年並(概してやや少)(-)</p> <p>考察： 大きな増加の要因はないので、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	ハスモンヨトウ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃のフェロモントラップによる誘殺数の半旬ピークは602頭(平年ピーク536.5頭)とやや多(+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(10月第2週)では、キャベツの寄生株率は7.0%(平年3.5%)と多(+)、ダイコンの寄生株率は6.0%(平年1.8%)と多(+)、ハクサイの寄生株率は1.0%(平年0.6%)とやや多(+)、ナバナの寄生株率は8.2%(平年9.6%)と平年並(±)(+)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は少～多(概してやや多)(+)</p> <p>考察： 現状は多めですが、気温の低下とともに密度も低下するので、予想発生量はやや多と考えます。</p>

4. 予察項目の見方

1) 「作物別の状況」の見方

発生時期（平年比）： 平年の発生月日からの差を「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階評価で予測します。ただし、発生時期が毎年大きく変化する病害虫では、日数の基準が下記より大きくなります。発生時期を予察する意義の小さい病害虫では予察しません。

日数	-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	1	2	3	4	5	6
評価	早	やや早		平年並				やや遅		遅			

発生量（平年比）： 発生密度の平年値からの差を「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階評価で予測します。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

			平年値 ↓			
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少	やや少	平年並	やや多	多	

発生量（程度）： 発生程度を「小、中、大、甚」の4段階評価で予測します。評価の基準値は病害虫毎に異なりますが、大雑把には、「見た目の多さ・少なさ」です。甚になるほど見た目は多くなり、小になるほど見た目は少なくなります。「発生量（平年比）」と比べることによって、「平年並に発生程度が小さい」「発生程度は大きい平年並の発生量である」「平年より多いが、発生程度は小さい」「平年よ

りやや少ないが、依然として発生程度は中くらいである」等のように判断してください。

小	中	大	甚
---	---	---	---

要防除圃場率（平年比）： 防除の必要性の目安を「低、普通、高」の3段階評価で予測します。「普通」であれば、県下の大半の圃場では防除暦に沿った通常の防除をしていればいいと予想されます。「高」であれば、防除時期の見直しや追加防除などが必要な圃場の割合が相当増加すると予想されます。「低」であれば、防除回数を減らせるか防除しなくても済むような圃場の割合が相当増加すると予想されます。

低	普通	高
---	----	---

発生消長の一例： 発生予報は向こう1か月の予報ですが、その前後を合わせて40日ほどの病害虫の発生消長の一例をグラフで示します。大まかな目安として利用してください。

防除の注意事項： 向こう1か月の病害虫の特性と防除に関する説明です。

2) 「発生時期・発生量（平年日）の予察根拠」の見方

(±)：平年並の要因

(+)：発生量増加または発生時期遅延の要因

(-)：発生量減少または発生時期早期化の要因

5. 今月のトピックス 「キャベツ黒腐病について」

本病は各種のアブラナ科野菜に発生する代表的な細菌性の病気です。キャベツは、ハナヤサイやブロッコリーと並んで被害を受けやすい作物のひとつです。近年では、台風の襲来が多かった平成16年に発生が多く見られました。

◆被害の様子◆

圃場では下葉から発生し、葉の縁にV字に入り込んだ扇状の黄色病斑となり、褐変しながら拡大していきます。病斑部は古くなると枯死して乾燥し、破れやすくなります。被害が激しいときには茎まで侵されて、導管部は黒変します。

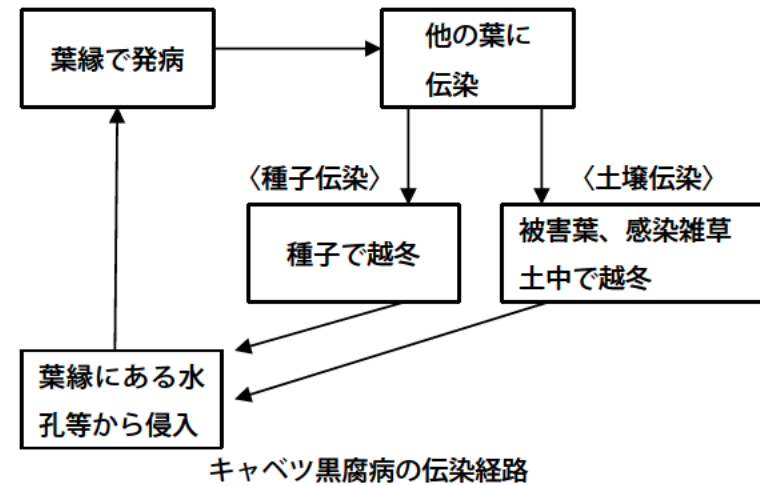


被害の様子

◆伝染経路と発病条件◆

種子伝染と土壌伝染があり、種子伝染の場合は、種子の発芽後子葉の水孔等から侵入します。土壌伝染の場合は、降雨時の雨滴によってはねあがり、葉縁の水孔等から侵入します。侵入した病原菌は導管を伝わって広がり、4～6日もすると病徴が現れ始めます。

本病は、夏や冬に発生することは少なく、9～10月頃の比較的気温が低く、降雨が多い年に発生しやすくなります。育苗中に大雨にあたり、本圃定植後に台風の被害を受けて茎葉に傷ができたりすると多発することがあります。



◆防除のポイント◆

- (1) 大雨や台風、長雨のあとは、天候が回復しだい薬剤を散布します。
- (2) アブラナ科作物の連作は避け、黒腐病に強い品種を使うようにします。
- (3) 病気にかかった葉などは伝染源となるので、圃場に放置せず外に出して焼却するか、土中深く埋めます。

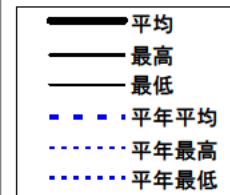
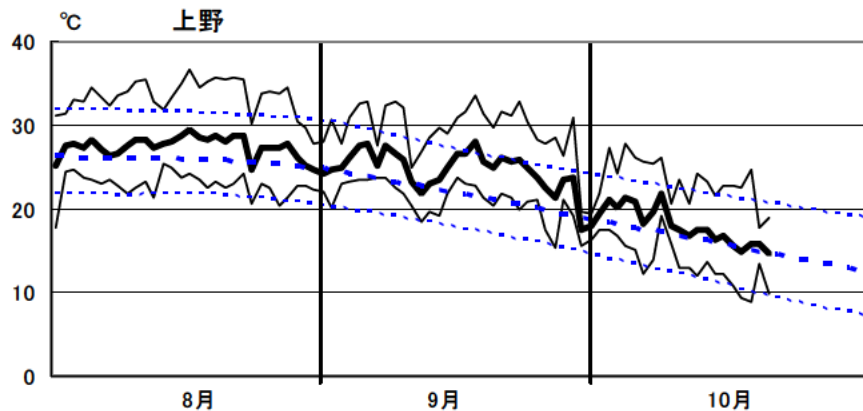
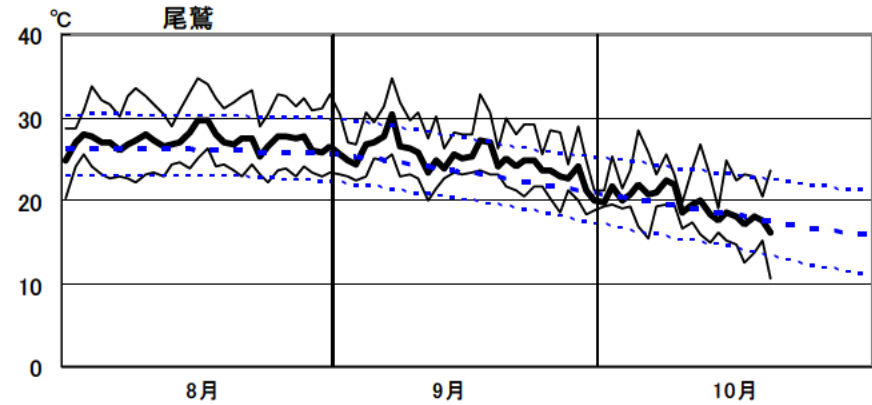
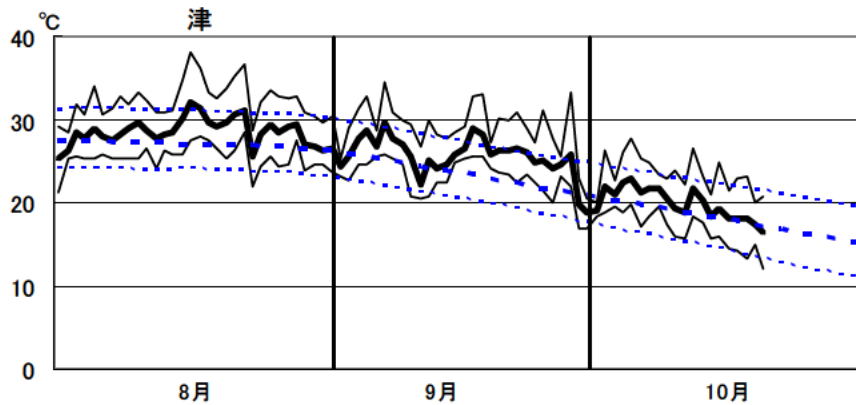
6. 気象のデータ

東海地方 1 か月予報 (平成 19 年 10 月 19 日 名古屋地方気象台発表)

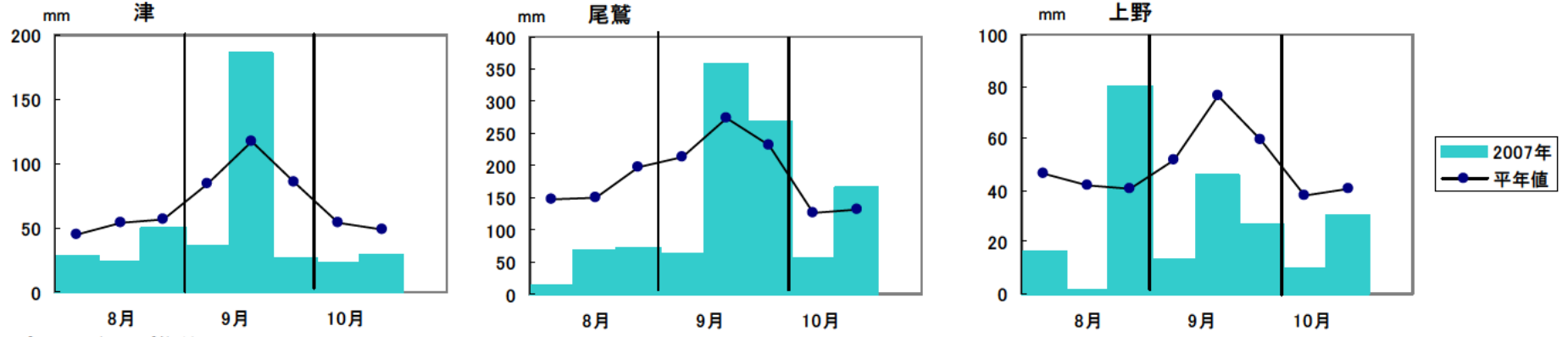
東海地方の向こう 1 か月は、天気は数日の周期で変わるでしょう。期間の中頃には低気圧や前線の影響を受けやすい時期がある見込みです。

1 週目 (10 月 20 日～26 日)	期間の中頃までは高気圧に覆われ晴れる日が多いですが、期間の終わりは気圧の谷の影響で曇る日があるでしょう。	晴れ日数の平年値 約 5 日
2 週目 (10 月 27 日～11 月 2 日)	天気は数日の周期で変わりますが、低気圧や前線の影響を受けやすく平年と比べて曇りや雨の日が多い見込みです。	同 約 4 日
3～4 週目 (11 月 3 日～16 日)	天気は数日の周期で変わるでしょう。高気圧に覆われて平年と同様に晴れる日が多い見込みです。	同 約 8 日

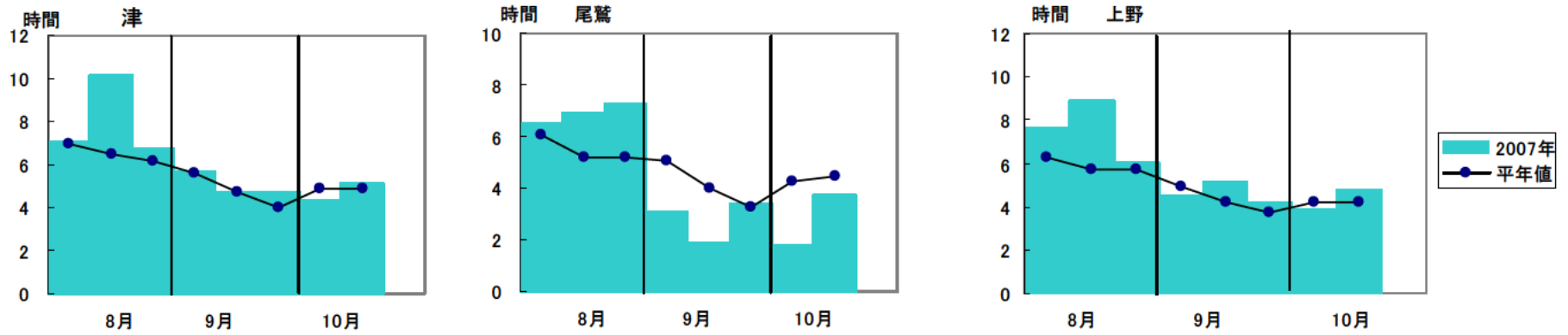
気温の日別推移 (気象庁発表データ <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php> から作成)



降水量の旬別推移 (気象庁発表データ <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>から作成)



日照時間の旬別推移 (気象庁発表データ <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>から作成)



7. おしらせ（前回と異なる項目にはNEWの印があります）

1) 利用方法

この病虫害発生予報は、定期的（4～8、10、3月各月の下旬）に発表されます。この予報の他、不定期に警報、注意報、特殊報、技術情報も発表されます。

これらの資料は全部または一部をコピーして再配布しても構いませんが、必ず「三重県病虫害防除所」の文字が入るようにしてください。

病虫害防除所ホームページには、これらの情報のほか、各種のグラフや写真も載っています。下記のアドレスからお入りください。

<http://www.mate.pref.mie.jp/bojyosyo/>

2) メール通知サービス

予報、警報、注意報、特殊報、技術情報が発表されたときに、ホームページに掲載されたという「掲載通知」を電子メールでお知らせするサービスを行っています。この通知を希望される方は、病虫害防除所ホームページの要領にしたがってお申し込みください。下記のアドレスからお入りください。

<http://www.mate.pref.mie.jp/bojyosyo/byotyumail.htm>

3) 農薬登録状況の最新情報

農薬の販売や使用に当たっては、農薬登録上の制限があります。農薬の使用時はラベルをよく読んでください。最新の農薬登録状況を確認するには、次のイン

ターネットサイトで調べるのが便利です（下記のアドレスに変更されています）。

独立行政法人農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報」

<http://www.acis.famic.go.jp/searchF/vtllm000.html>

4) 三重県病虫害防除の手引き

「三重県病虫害防除の手引き」の最新の冊子版（平成19年3月12日現在）を病虫害防除所ホームページに掲載しています。下記のアドレスからお入りください。

<http://www.mate.pref.mie.jp/bojyosyo/nouyaku/tebiki/20070312/070312tebik.htm>

5) 本冊子の利用の手引き書

本冊子の利用の便宜を図るため「平成19年度病虫害発生予報利用の手引き」を作成しました。下記のアドレスからお入りください。

<http://www.mate.pref.mie.jp/bojyosyo/yoho/h19yohotebiki.pdf>